

第八章：舞う神と舞わぬ神

1. はじめに

山折哲雄は日本の神は目に見えない存在であり、身を隠す特性がある（注1）という。もちろん、神というのは見えるわけがないが、見えない神というのは確立された神観念を持たないこと、神の具体的な身体性を感じ取りにくいことをいう。見えないという言説のなかにはさまざまな意味要素が内包されている。見えない存在であるからこそ、感応できるように工夫が必要になってくる。日本の仮面は世界的にもその類例がないほど、優れた仮面が伝承されている。その数においても、神社で納めて外に出さない仮面、神社あるいは個人の家屋に掛る厄除け仮面、神楽や能・狂言面のように顔につけて演じる演劇仮面など、さらに古代の仮面として伝えられている伎楽面や舞楽面まで含めると、数えきれないほど多い。仮面に対しては世界で最多の仮面保有国であるといっても差し支えないだろう。そのような仮面が多い理由の一つが、日本の神は多神的で、見えない神であることから生じたのではなからうか。

見えない、感じ取れにくい神々をいかに認識し、いかに表現するのが、祭りの本領といっても間違いないだろう。祭りは見えない存在である神霊を迎えて、供物を捧げ人間の願いを叶えるようにするのが目的であろうが、一方、祭りは見えない存在を見え認識するための工夫でもある。

特に日本の土俗信仰は多神的信仰である。その神の性格や、神観念をあらわす経典はほとんどない。祭りという行事のなかから、神の性格や日本人の神観念を見つけるしか方法はない。もちろん、神々の本地物のような神話が残されている場合もあるが、それはむしろ、そのマツリの説明にあてられたのが多い。神話が先か、祭りという儀礼が先かという大きな問題に直面するが、基本的には日本の信仰、あるいは、日本人の神観念は祭りを通して知るしかないと思われる。実際、神の像や神画などの特定なアイコンを

安置しているところはどのくらいあるだろうか。神像を神社に奉る場合はあるが、それは仏教の仏画や仏像が渡来して以来のことであろう。神の身体を隠すことによつて、神の崇高さを強調するためにできあがったシステムであるかもしれない。しかし、祭り日になると、隠れて見えない神をどうしても民衆（信徒）に確認させ、見せる必要が生じる。日本の祭り、特に神楽には様々なかたちで神が顕現する。祭りには姿をあらわす神と祭りの日さえも姿を見せない神がいる。たとえば夏祭りによく見かけられる神の乗り物であるお神輿を担いで町中をねりあるところにも、また神の象徴であり、神の乗り物として山車などを勢いよく引つ張る祭りにも主神の姿をみるのはなかなか難しい。ある時、お神輿の中に神体とされる小さい袋に包まれた玉のようなものを入れるのを目撃したことがある。厳肅に行なわれるタマイリ行事にカメラを向けて写真をとろうとしたが、神主に咎められて怒られたことがある。神の実体が顕されると神の尊さがなくなるのだろうか。ともかく、神は見せるものでもなく、見るべきものでもないという思想が働いていると思う。眷属神や下位神ではなく、神社や祭りの主神になるともっと厳しくなるだろう。

伝説や御伽話などにも主神は顕れない傾向がある。獅子や狐などの権現や眷属神だけが表に登場する例は多い。神事芸能というのは見えない神、身を隠した神を芸能化して見せる。即ち、神の姿を見せる場が神事芸能の場であるといつても間違いではなからう。神の仮面を被つて神を演じる神楽がある。しかし、神楽に仮面を被つて登場する神は祭りの主神ではない。祭りの余興として行なわれた神楽などは、直接祭りとは関係なく、後から付け加えられた例もすくなくない。祭りの付属祭祀として神の面をつけ神を演じる芸能が披露される例も多い。しかし、付属の芸能にしても、登場する面は神であるといわれている。勿論それらは後に添加されたにすぎないかもしれない。しかし、なぜそのように神の仮面が登場するようになったのか、具体的に神の姿を確認しようという心理的な働きとともに神を遊ばせることによつて祭儀の機能を高めるためであろう。神事に用いられている仮面は神を表象するが、祭りが行なわれる神社の主神は面形で登場する例は少ない。同じく神といつても面形で顕れる神とそうではない神がある。祭りに登場する神の性格を把握するためには、各々の神々を分類して分析してみる必要が生じる。ここでは便宜上、主神、副神、職能神、鎮魂神（注2）に分類してそれぞれの性格について考えてみたい。主神は神社に常に祀っている神であり、祭りにおいて中心的な神である。それから祭りの期間中のみを迎えられ祭られる神々を副神という。副神は祭りの期間中だけ迎える神で、祭り

が終わると帰つてもらう神々である。主神や副神の使い神や眷属神、権現といわれる類で、祭りの利益に直接に働きかける存在を職能神という。祭りの中でも悪霊や亡霊、招かれない神霊、つまり鎮めるべき存在を鎮魂神に分類する。神の顕現の方式によって、祭りの場に姿を顕し、舞を舞う神と、祀られてはいるが姿を顕さないで舞わぬ神に分けられる。それらの神は祭りの担い手によつても分類して見る必要がある。即ち祭りの主神や副神に対しては祭りの主管者である神主や禰宜によつて行なわれるが、鎮魂神や職能神は一般人（氏子）などによつて行なわれる傾向がみられる。

そのような傾向は韓国の巫俗の神々においても同様である。韓国シャーマニズムである巫俗の神々も姿を顕す神がいる反面、姿を見せない神がいる。韓国巫俗の場合は神がかりという現象が大きな特徴なので、神がかりする神がいる一方で、神がかりしない神もいる。以上のような疑問を抱きつつ、日本と韓国の神事芸能を比較しながら、それらの理由を明らかにしたいのが本稿のねらいである。本論に進む前に一つことわっておきたいのは、本論は歴史的な伝承や他芸能との影響関係については問題視しないことにする。仮面と芸能、それから神々の顕現についてのその背景に流れている心意的な側面からのアプローチの試みである。

2. 神がかりから仮面へ

日本のどこの祭りにしても、一柱のみの神を祭るところはないようである。いかなる祭りにおいても、多種多様な神々が登場する。祭られる神と祭る人間がいかなるかたちで取り込まれているかは祭り研究に欠かせない課題でもある。信仰儀礼の共通性、あるいは普遍性ともいえるのは、神が目に見えない存在であり、観念的な存在である。その見えない神と人間が如何にコミュニケーションをとるかは、各々地域の文化や、社会的背景により異なる。

見えない神を見えるようにアイコンを作ったり、神の声、即ち、託宣を文書で書いたり、あるいは神の業といわれる伝説や神話が作られたりするのである。色々な形で特定の神へのイメージや信仰形態を構築しているが、そのなかでも、もつともわかりやすく、しかももつとも衝撃的で、有効な方法の一つが神がかりであると思われる。見えない存在である神が人間の身体に乗り移つて神の

言葉を伝える方式が神がかりである。神がかりはシャーマニズム現象の要になるのはいうまでもない。シャーマニズムはシベリアを中心にその周辺に見られる信仰現象をさすが、神がかりは特定地域のものではなく、ある意味では人間が住んでいるところには多かれ少なかれ存在する。仏教、道教、イスラム教、それからキリスト教さえもその現象は見られる。それほどシャーマニズムの現象は普遍性を持っているといえる。日本神道のなかには仏教、儒教、道教、陰陽道などの要素が習合されているといわれるが、シャーマニズムの特徴である神がかりを通して神の声を聞く仕組は欠かせない最も重要な要素の一つである。もちろんシャーマニズムの定義の規定にも諸説あるが、シャーマンという職能者がトランス (trance) 状態で神霊と直接交流するシステムには変わりがない。

神がかり現象についてはいまだ正確に検証されていない。近代科学的な研究や精神分析的な研究分野においても注目を集めているのは周知のとおりであるが、人間の精神面において不思議な現象の一つであるには違いない。神がかりの現象も祭りの構造と同じく、社会的、文化的背景によって異なるのはいうまでもない。たとえば、東北地方のイタコの口寄せ現象を同じく神がかりといっているかどうかという問題も生じるが、人間 (イタコ) の身体を通して神霊と直接交流して、見えない存在を信徒 (依頼者) に認識させ、見えない存在の意思を伝える構造は変わりがない。

神がかりの現象は歴史的な背景を含めて、人間の知識や思考の近代化などにより無くなりつつある。しかし、神がかり現象が行なわれなくなったとしても、その代替の仕組みはさまざまなかたちで考案されている。代表的な代替物の一つが仮面である。神がかりはそれを行なう巫者の手から離れて民間人に移ることによって、神の顕現を示す必要が生じたと思われる。それらの現象は現在伝承されている神楽などの構造からもみることができるといえる。

その例として霜月神楽として知られている遠山祭りや坂部冬祭り、それから韓国の巫俗儀礼と仮面戯を通して考えてみたい。遠山祭りと坂部冬祭りは主神と副神、それから職能神、鎮魂神が画然として区別されるので、数ある祭りの中から敢えて二つの祭りを事例として選んだ理由である。

3. 遠山祭りの鎮魂神

遠山祭りは長野県下伊那郡上村、南信濃村の各集落で二月初旬から中旬にかけて順次行なわれる霜月神楽である。全区域に数一〇箇所で伝承されているが、現地で参観した上町、中郷、木沢、八日市場の中で木沢を中心に登場する神の性格について述べることにする。遠山祭りの構成は前半部と後半部になっている。まず、祭りの場所を清め、全国の神々を迎える。それから迎えた神々に湯釜のお湯を献上し願を立てる。全国の神々を帰してから地元神々を迎える。後半部の地元神は仮面をつけた姿で登場する。部落によって祭りの順序や内容に多少違いがあるが、全体的な構造は大同小異である。二〇〇〇年二月一〇日から二二日にかけて夜通しで行なわれた木沢霜月祭りの順序は次のとおりである。

大祓い、御扉開き、三条の祓い、ひよし神楽、神名帳、湯立て、太夫舞、宮浄め、八乙女、家浄め、四つ舞、願ばたき、天伯の湯、中祓い、禊の舞、鎮めの湯、面（おもて）、かす舞、木の根祭、了宴（直念）

祭りの中で神名が見えるのは「神楽歌」と「神ひろい」、「神名帳」である。「神ひろい」歌に見られる神名は、

梵天帝（泰） 釈、東西南北方の大神小神、中央の十二ヶ方大神小神、おぶすな、天津神、五代天神、七代地神、諏訪大明神、八幡、高津権現、和田村の神社、八重河内神社、上村総社、木沢の村社、白山（しろやま）神社、三能神社、お熊野神社大明神、日月神社、三峰神社、五社大神、東の天伯、西の天伯、宇佐八幡社、浅間神社、親城大神、愛宕大神、池大明神、お鍬大神、小山塚稲荷、小嵐稲荷大神、一の宮、二の宮、西大神、八幡大神、（注3）

がある。「ひよしの神楽歌」には日本全国の大神が歌われる。神名帳には木沢村八社の御神正八幡宮から日本五畿七道の明星王護の鎮守八幡三社、加茂社、稲荷、祇園、大原、春日、住吉、日吉、松尾、吉田、平野、北野御山天神、キ船の山々宇都宮、山王七社の宮、大日本六十六ヶ国の大小の神祇、天神の五万五千五百五十余神とその眷属、天の二十八宿と地の三十六神の大小神祇及びその眷属、延喜式神名帳に見える日本全国の大小神祇三千一百三十二座なかからの一宮の神名が見える。

以上のように数えきれないほど多くの神名が唱えられるが、それらの神々はそれぞれの個性や具体性が乏しい。日本全国あらゆる

る神を招くことになっている。山折哲雄がいうように記号化された神であり、具体性を欠如した神である(注4)。

当祭りが行なわれる正八幡神社には菅田別尊、御鍬様、天照皇大神、御社大神、両大神、池代明神が祭られてある。本殿を向かって右には御鍬様の祠が、左には池代明神の祠がある。御鍬様は御神体として、鍬と弓が祀られている。池代明神の御神体は鍬の柄である。鍬の柄に使用する木を池からとってきたので池代明神と称したという(注5)。木沢霜月神楽の主神は神社に祀られている神で、そのほかに列挙した多くの神々は祭りの期間中に迎えられて、祭りが終ると帰るのである。つまり、副神である。祭りの主神にしる副神にしる、顕現化するための神の仮面はない。上に述べた祭りの各次第の中から「面(おもて)」を除いて大体は神の身体を表示することはない。それらの神々にたいしては人間の側からの一方的な所作である。即ち、神の舞ではなく、人間が神に捧げる所作や舞である。つまり神にたいする人間の舞である。その中で神自身の舞といわれるのは「太夫舞」のみである。祭りの主管者である禰宜の役目である。現在は神がかりの現象はないが、もし、神がかりがあったとしたら、この「太夫舞」のときではなからうか。「太夫舞」がいかなる神についての舞であるかは定かではない。なぜなら禰宜が素面で舞うからである。

「太夫舞」のほか舞う神は後半部に登場する面(おもて)である。面をつけて登場する神面の中で「火の神(大天狗)」、「八幡大神」、「小嵐大神」、「水の神」は太夫が務める決まりがあるが、他の面は氏子の中で誰が被ってもよいのである。(注6)面の部分に登場する神は次のとおりである。

火の神、遠山両大神、一の宮、二の宮、八幡大神、若殿大神、多賀大神、浅間大神、津島大神、子安大神、小嵐大神、四面(山の神、金山、半僧坊、猿田彦)、両老神、大国(愚)天、舞稻荷、水の神(小天狗)、宮天伯

以上の面に太夫(禰宜)が努めるものと、氏子(一般人)が務める神を分離してその特徴を考えてみる。

「火の神」は大天狗ともいう。禰宜が務める。鼻高い面で一の釜の前で九字を切り、釜の湯を素手で跳ね上げる。「水の神(小天狗)」も禰宜が務める。「火の神(大天狗)」と同様の九字を切る。「八幡大神」は当正八幡神社の神の面と比較的新しい面である。

(注7)「小嵐大神」は本来あったのではなく、後に新しく加えられたものである。(注8)「遠山土佐守とその息子、加兵衛である」といわれる「両大神」、女面で両大神(遠山土佐守の親子)の奥方といわれる「一の宮、二の宮」、老人面で遠山土佐守の父であ

る遠江守とされている「親城大神」、八個の面で「若党八人」とも呼ばれ遠山一族といわれている「若殿大神」は百姓の一揆で殺された遠山伝説に因む遠山一族の死霊をあらわす面である。

「多賀大神」、「浅間大神」と「子安大神」、「津島大神」は神楽歌や神名帳に見える副神であるが、新しく加えられた面である。これらの神は本来面形で登場する神ではないことがわかる。それから四面は一人ずつで見物衆に飛び上がり体あたりする。四面の神は暴れる神で主神でも副神でもない。「両老人」は落ちぶれた老人夫婦の姿で登場する。ジイサは神太夫ジイサ、バアサはシヨンベンバアサとも呼ばれる。バアサは手に榊の束をもって見物人を殴りつけて暴れる。最後にはジイサとバアサが抱き合って拝殿に退場する。シヨンベンバアサのシヨンは小便のことであるのはいうまでもない。それほど汚い存在であり民衆に親しい存在として認識されているのがわかる。「大国(愚)天」は昭和に入ってから奉納された面である。舞稻荷は狐面をつけ飛び上がりたり走ったりする稻荷神の眷属である。最後に登場する「宮天伯」は宮の守り神として、残っている悪霊を剣で脅かし払う役割をになう。中郷地域では剣と弓矢をもって登場する。

以上面形の神の特徴を整理してみると祭りの主管者である禰宜が務める「火の神(大天狗)」、「八幡大神」、「小嵐大神」、「水の神(小天狗)」と最後の「宮天伯」は祭りの職能神として登場している。新しく付け加えられた面の副神以外は遠山一族の面という事になっていく。それは遠山祭りが遠山一族の死霊祭であることがわかる。それと神主や禰宜が務めるのではなく、一般人が担っていることから御霊信仰にもとづいた鎮魂の目的を果たしていることがわかる。神主や禰宜が担う上位神ではなく、一般人が務めることによって仮面をつけるようになったのではなからうか。死霊の祀りを主管者が担うことになったら仮面をつける必要はなかったかも知れない。

面の神々は村人に親しく感じられる下位神である。遠山祭りの起源伝説は祟り神の性格をよくあらわしている。この地域は深い山岳地帯であるゆえに稲作農業はほとんどなく大部分が麦、小麦、稗、豆等、山の斜面を利用した畑作物が主要生産物である。厳しい自然環境のなかで、当時の領主であった遠山土佐守は住民を苛酷に搾取した。圧政に耐え兼ねた百姓たちが一揆を起し、江戸から帰る途中の遠山一族を、隣の大鹿村で襲撃し遠山一族を殺害した。遠山一族が滅亡した後から、凶作が続き、疫病が蔓延

するようになる。村住民たちはこのように疫病と凶年が続くのは殺された遠山一族の怨霊の祟りであると判断するようになり、その遠山一族の怨霊を祀るようになったのが遠山祭りの始めであると言われている。遠山の一族の霊とされ八人が仮面をかぶって登場する。それから遠山一族が殺された大鹿村鹿塩の八幡神社の脇には遠山様の死霊を祀った祠が今もあり、その中には遠山一族の仮面と人形の神様が祀られている。(注9)

遠山祭りに百姓である自分たちが殺した遠山一族の面を被って登場することから、面形の登場は一種の鎮魂祭であることをものがたっている。もし、神がかりまたは口寄せを行なうなら、巫者に遠山一族の死霊を呼び降ろし、口寄せ(託宣)により死霊を鎮めたかも知れない。しかし、口寄せができない一般人(氏子)が死霊の面形舞を披露することになったのは、憑依が禁止された以後の仕組になっていると思われる。遠山一族の死霊は一揆を起こした百姓にとっては好感的な存在ではない。むしろ、追ひ払いたい存在であったに違いない。しかし、祟りを起こす死霊の存在を無視することはできない。祭りの主神と副神などの上位神を祀ったあとに、下位神として最後に面形にて、しかも神主や禰宜のような主管者ではなく、一般住民が担うようになったと思われる。遠山祭りには八面以外にも様々な面形が登場するが、鬼や狐など動物が登場する場合も禰宜などの祭りの主管者によって厳かに行なわれるところには登場しない。ある意味では招待されない存在である。できれば避けたい存在であるが、祟りを起こす怖い存在なので、それらを祀らなければならなかった庶民の情緒がうかがわれる。

神が登場するとき神を引つ張り出す役が決められている。提灯をもつ道案内役である。勿論、面形の神は舞を舞うというより、練り歩くような所作である。提灯をもつて道案内するのは、仮面を付けているのでよく見えないから、または大勢の人が駆けつけ混雑しているから先道を開く現実的側面も考えられる。しかし、神を案内する役はかつて神を降ろす、所謂司祭者の役の変形ではないかと思われる。本来、神の顕現は巫者に司祭者が神がかりさせた形式であった(注10)が、神がかりがなくなり、特に一般人が神の役割を担うことになって、面をつけるようになったと思われる。面形の神は巫者の神がかりによる方式でもなく、禰宜の厳粛な祭式でもない、即ち、正式な祭祀でむかえられる神ではなかったのである。祀らないと祟りを起こす存在であったが、正式に招待されていない存在であったと思われる。

4. 坂部冬祭りの面形

坂部冬祭りは長野県下伊那郡天竜村大字神原字坂部（サカンベ、サカベ）の諏訪社で一月四日から五日にかけて夜通しで行なわれる湯立神楽の一種である。祭りの主な場所は諏訪社の拝殿である。四日午後三時ころ祭りの主役は天竜川の支流である虫川で禊をする。それからその川の水を竹筒にくんで神社に持っていく。拝殿の壁に掛けておいて、湯立の水として使う。それから村の入口にある火の社から太鼓と笛を奏しながら、山の麓にある諏訪社に向かってお練りが始まる。諏訪社まで到着する間、何回か休憩をとりながら、神酒を飲む。諏訪社に到着するころには酔って勢いがつく。神社の境内には庭火がつく。

一方、神社の拝殿では厳肅な神道式の式典が行なわれる。境内の庭火の勢いと共にはますます賑やかになる。村の人々も一緒に伊勢音頭の歌を歌う。拝殿の正面に浦安の舞が奉納される。禰宜と神子による「申し上げ」が行なわれる。申し上げは太鼓の調子に合わせて鈴を振りながら神々に祭りを行なう場所を知らせ、神々を迎え、お湯を捧げるといった内容である。

拝殿の上手に湯立の釜を設ける。五徳の上に釜を載せ、釜には注連縄を巡らせる。拝殿の壁に掛けてあった竹筒の水を入れ、火をつけて「釜払い」を行なう。それから子供たちによる「花の舞」（ユワギ（上衣）、鈴と扇、大神宮）「火の大神」「神楽大神」、「津島大神」、「浅間神社」、「諏訪神社」などへの清めの湯立舞が行なわれる。夜中三時ころに神子三人と提灯持ち子供二人が下の森の社まで降りて仮面箱を担いでくる。面が到着すると拝殿（舞殿）の奥に諏訪社の神紋がえがかれた幕を降ろす。面が本殿の前に並べられ祈禱が行なわれる。それから湯立が終ると、面形の舞が始まる。面は鬼、水玉、火玉、翁、日月、獅子舞、などが夜明けまで続く。

坂部冬祭りに迎えられる神も遠山祭りと同様主神、副神、それから面形で登場する職能神、それから鎮める神に区分される。坂部冬祭りが行なわれるのは諏訪社で「下の森」と「上の森」がある。「下の森」に祭る神は火王様、水王様、鬼神、天公鬼、天狗などの面形のほか若宮様、関様、宮土公様、ネギドノ・イヌ（狼）山の神などがある。当祭りに使用する面形が保管されている。

諏訪神社の社殿は「上の森」のことをいう。「上の森」で祭っている神は一七柱、または一五柱ともいう。

お諏訪様、大神宮様（天照皇大神）、宮土公様、二宮様、日月様、関様（関家の氏神）、八坂様、秋葉様（秋葉山大権現）、金毘羅様（金毘羅大権現）、山の神様、津島様、神楽様、若宮大明神、稻荷大明神、社守、棒振神、大杉神、宮天狗、ネギドノなどである。（注1-1）

祭りは諏訪神社で行なわれるだけに以上が祭りの主神であろう。それから当祭りの祭式の一つである「申し上げ」に見られる神名は次のとおりである。

大土公神、中土公神、小土公神、氏大神、天照皇大神、浅間神社、津島の社のスサノオノ命、関の御神、シカ神、天神、地神、木の御神、火の御神、金の御神、水の御神、土の御神、諏訪御神、白羽の御神、神楽大神、秋葉の神社、金毘羅様、八坂の神社、八幡神社、白山神社、開祖の神社、山の御神、川水神、道祖神、塞の御神、大神、小神、（注1-2）

当社で祀られている主神と「申し上げ」に見られる副神はほとんど山折哲雄氏がいう記号化された神々である。即ち、肉体化されてないし、具体的な個性を持たない神々である。

祭りの最後に登場する面形の神も同一ではなく、職能神と鎮魂神に区分される。

湯立舞が済むと面形の舞が始まる。最初に登場するのは赤い鬼面に赤い装束をつけ、わらじを履き、木製の鉞をもって登場する。禰宜二人が松明を持って鬼と対面する。禰宜の松明と鬼の鉞をぶつけ合う。鬼は足踏みをしたり飛び跳ねたりする。幕の中にはいる。次に大型の二人立ちの獅子が登場する。禰宜が笹を持って獅子をあやす。引き続き鬼神面や天公鬼、青公鬼が登場して禰宜と問答する。禰宜に負けて暴れる鬼が穏やかな鬼になる内容である。水王様が水を釜にいれお湯が鎮まる。見物人にお湯をかけたたりする。火王様が登場して釜の周りを三度行なう。そうすると、鎮まった釜の湯が沸きあがる。

鬼、獅子、火王様、水王様などは非人間的な存在で、禰宜によって抑えられる、所謂禰宜の力をみせる場でもある。それらのモ

ノは湯をわかし、悪霊を追い払ったり、湯を鎮めたり、沸かしたりする職能神の類である。次は翁面が登場する。白い翁面にほおかぶりをしていゝ。腰には太刀を帯び、太刀から扇をぶら下げて、右手に鈴、左手に扇を持ち、舞庭に出る。大黒柱の前で禰宜と問答が行なわれる。日月面と女郎面が登場して戯れる。先ず老人の姿の日月面はぼろ上衣を着て登場し、見物人と戯れたり、釜の墨で顔に塗つたりする。墨を顔に塗るのは顔洗ひのことであるが、逆に顔が黒くなると見物席には笑いが飛ぶ。女郎面は振袖姿で鈴と扇をもつて登場する。日月面の爺に藁で編んだ烏帽子を被せる。烏帽子を被ることは出世したことを意味する。禰宜から邪魔され、周りの見物衆からやじられると、二人は肩を抱いて幕にはいる。次は素面であるが、狂言風の「海道下り」と「魚釣り」が行なわれる。海道下りは爺と婆があらわれる。老人夫婦の落ちぶれた姿である。禰宜が出す大根を餅にみたてて餅つきをする。「魚釣り」ではほおかぶり、片足だけ草鞋をはいた三人の漁師姿で釣り糸には木製の魚がついた釣り竿をもつて登場する。魚釣りの餌を撒く。餌は生米粉を口に含みまわりに吹き散らす。見物衆にも吹き散らすと明るくなった朝に笑いが飛ぶ。面形送りは面形が済んだあと迎えと同じく箱に収めて下の森の社に送る。お客様送りともしう。提灯がいらぬほど明るくなったが、提灯持ちの二人の少年を先頭に神社から降りていくのである。禰宜をはじめ舞手たちは「ご苦労さまでした。お帰りになって、ごゆっくり休んでください」と挨拶で見送る。その後神送りや火伏せなどの行事が続いて行なわれる。

以上冬祭りの概要を述べたが、祭りに登場する面形の登場は神の登場といわれるが、しかし、前にも述べたように上級神は面形で登場することはない。

当社で祀っている主神や、湯立のお湯を捧げる神、「申し上げ」に見られる神名の神は面形としては登場しない。面形として登場するのは、火王、水王の鬼面などの職能神であり、落ちぶれた姿の招待されていないモノである。翁、日月面、女郎面、素面の爺と婆、釣り漁師たちの狂言は本来の祭りにあとから加えられたといわれる。芸能史の史実的な立場から考えると確かにそうである。しかし、祭りの全体の構成及びその位置や狂言風の面形の役割を考えると、祭りの鎮魂的な性格の一面であり、鎮魂の神に想定される。それらの神は祭りの最後に登場する。その役を務める人は祭りの主管する禰宜ではないこと、即ち、神子、氏子によって演じられる。面形が登場して面白さを提供するという見方も考えられるが、祭りの全体構造からみると、最後に登場する面形は

献湯の神々とは異なる。当神社である諏訪神社の湯立が終ると、面形の舞が始まる。面形の舞も前半と後半に分けられる。すなわち、前半の「たいきり面」、「獅子舞」、「鬼神面」、「天公鬼面」、「青公鬼面」、「水王様（しずめ様）」、「火王様」などは各々役割を果たす職能神である。その後登場する狂言風の「翁面」、「日月面・女郎面」、「海道下り」の爺と婆、「魚釣り」の漁師三人は滑稽な存在であり、招かれたものではない。「翁面」や「海道下り」の人物は禰宜に止められる存在になっている。「日月面」では道化面や破れた衣装を着けた爺が女郎面に戯れる場面などは落ちぶれた神々は招待されていない存在であり、主神や副神が迎えられるときについて来たモノである。神というより霊、またはモノというのが相応しい存在である。可笑しく笑いを生み出す役ではあるが、鎮魂されるべき存在である。前述した遠山祭りでみられる構造と一致している。即ち、神がかりの対象神でもなく、祭りを主管する禰宜によって迎えるものでもない。

以上霜月神楽といわれる遠山祭りと坂部冬祭りで登場する神について述べてきたが、それらの現象は韓国の別神グツの最後に登場する雑神が仮面や扮装で登場することと、さらに、祭りの主管である巫女ではなく、囃子方である楽士によって演じられるのと同じ仕組みになっている。これは韓国仮面戯に登場する人物や仮面戯の性格を究明するには重要な手がかりになると思われる。

5. 韓国の別神グツにおける招かれぬモノ

東海岸別神グツは韓国の東海岸最南端である釜山東來から最北端江原道固城郡に至る東海岸地域で一年または数年毎に行なわれる部落巫祭である。部落祭は必ず巫儀とは限らないが別神グツは必ず巫儀で行なわれる。村人によって選定された祭祀官(当家)たちによる儒教式の祭祀は全国的に見られる。決められた祭日の夜(一二時)、村の守護神が祭られている城隍堂(祠)にて祭祀官による部落祭祀が行なわれる。しかし別神グツは毎年、三年、五年、七年、一〇年毎に特別に巫者(巫堂)に依頼して2日から一週間にかけて大掛かりに行なわれる。別神グツ(巫儀)は内陸地方にもあるが、特に東海岸に広く伝承されているのは、危険を伴う海で仕事をしなければならない自然的、社会的環境にも起因する。そしてもう一つは東海岸の南端から北端まで一族の巫(巫

堂)グループによって行なわれているからである。その巫の一族は幾つかのグループに分けられているが、同じ親族によって執行される。部落によって事情は異なるが、漁業組合が中心になって準備をする場合が多い。別神グツの開催が決まると、巫者(巫堂)に依頼して吉日をきめ、巫者と契約をする。祭祀を執行するのは決められた巫グループであるが、あくまでも祭り全体を仕切っているのは村の総代など祭祀官に選ばれた人たちである。巫式の別神グツといっても巫式のみで行なわれる場合は稀である。大体巫式と儒教式の二通りで祭りが行なわれる。東海岸別神グツが行なわれるところは一九七七年までは一八ヶ所があったという(注13)。崔吉城は、一五五ヶ所を報告している。(注14)

村の守護神が祭りの中心的な神であるが、登場するのは多神である。事例をあげて祭りの概要を述べてから神々の性格や顕現の方式を考えてみたい。

韓国の東海岸の蔚珍郡蔚珍邑南三里貢税洞(ゴンソク村)にて一九九六年三月四日〜六日(旧暦一月一五日〜一七日)に行なわれた部落祭(別神グツ)の祭式は次の順序で進行する。

- ① 祭場を清める「不浄グツ」
- ② 諸神々を迎える「請座グツ」
- ③ 村の守護神を迎える「堂迎えグツ」
- ④ 釈迦世尊を祭る「世尊グツ」
- ⑤ 各家の祖先を祭る「祖先グツ」
- ⑥ 地の神を祭る「地神グツ」
- ⑦ 家の守り神をまつる「城主グツ」
- ⑧ 「山神グツ」
- ⑨ 「天王グツ」
- ⑩ 「沈清グツ」

- ① 將軍神の力をみせる「將軍グツ（ノットンウグツ）」
- ② 天然痘という病気の神を祭る「お客グツ」
- ③ 巫の祖先神を祭る「ケイミヨングツ」
- ④ 祭官中一人に神のヨリシロ（竹の枝に白紙の御幣を付けてある）を板の上に立たせ神の意思を聞く「竿迎えグツ」
- ⑤ 「灯歌」
- ⑥ 各家の祈主（主婦）が供え物を祭壇の前に供えて個人的な祈禱を行なう「デグツ」
- ⑦ 海を掌る竜王神を祭る「竜王グツ：水桶乗りグツ（ムルドウグツ）」
- ⑧ 「コリグツ」
- ⑨ 「乞粒（庭踏み）」
- 本来なら⑭「竿迎えグツ」の次に行なうべきであったが、最後の夜でもあったので巫堂の配慮で、村人の宴が長らく行なわれた。しかし、村人から物言いが付けられて⑩「龍王グツ」を簡単に終えてしまったことに村人と巫堂との揉めことが起きた。竜王グツは海をつかさどる神で、海辺の部落民においては最も大事な祭式なのに、巫堂があまりにも簡単に終えたからである。巫堂が竜王グツは次の朝明るい内に行なうことにしようと言明があつてようやくおさまつたが、このように巫儀は巫堂が行なうが、村人が厳しい目で監視していることがわかる。
- ⑰「デグツ」が終ると祭壇を片付ける。その後は海を向つて木綿（道）を敷いて行なう。すべての巫儀を終つてから各家を廻りながら「乞粒」を行なう。家の人は米を入れた器に蠟燭を立て待っている。巫堂全員が樂器を奏しながら各家の隅々まで不浄を払い落とす。他に庭踏みというのは悪霊を踏み鎮めることである。最後の破縁グツは巫儀に使つた物を燃やすことを言う。神々のすべてを送る過程である。

地域によって、多少の異同はあるが、全体的構成は大体以上のとおりである。

別神グツは部落の守護神であるコルメギ神の祠（堂）の前に仮祭場を作つて行なわれる。堂では部落の祭官による儒教式で行な

われる。巫式を行なう巫堂は一族であると前述したが、女巫が全体を主管して儀礼を担当し、男巫は囃子を担う。祭壇の前で巫儀を進行する巫女に対して杖鼓という楽器を担当するのは必ず巫女の主人である。もし主人がいない場合は血縁が一番近い男性が担当する。巫儀に使う楽器はいくつかあるが、杖鼓が一番重要な楽器になっている。

別神グツの主神は部落の守護神である。守護神はコルメギ城隍様と呼ばれる神である。コルメギは郡（コウル）塞ぐ（マクタ）からきたといわれている。当部落の守護神がまつられている祠には「皇大神之位」という位牌を安置している。位牌は黒い板に白い字で書いてある。皇大神がいかなる性格の神であるか定かではない。推測にすぎないが、戦前日本植民地時代に造られたものではないかと思われる。その根拠になるのは祠の天井の柱に、

龍 大正十五年丙寅八月二十七日巳告堅柱上棟

龍 西紀一九八七年丁卯十一月二十日告改築上棟

と書かれたものである。大正一五年八月二十七日に祠柱を建て一九八七年一月二〇日に改築したと記してある。村人の神に対する観念も確立されていないことがわかる。東海岸地域には部落神として、コルメギハルベ（爺）やコルメギハルメ（姥）、またはコルメギハルベ・ハルメの夫婦神になっている場合が多い。同じ神名で祀っているところが多いことから神は個性をもっていないことがわかる。村人に聞いてみてもコルメギ守護神について具体的な話は聞けない。各祭式の構成を見ると、先ず巫女が祭壇に神酒を捧げて拝礼をしてから、見物席にむかって、神の由来などの本地を長々と語る。それから本地語りの内容に従って神を演じる。最後には祭壇に捧げた神酒を捨てて終る。一つの祭式が終ると見物人と一緒に宴が行なわれる。神酒を祭壇に捧げることは神を招くことであり、最後に神酒をすてるのは神を送ることである。

本地の内容に従って神を演じるのはすべての祭式（すべての神）に行なわれるのではなく、定められた神のみに対して行なわれる。たとえば「世尊グツ」にてお坊さんの姿で山の奥のお寺から俗の世界に降りてきて、居眠りしたり、歯磨きをしたり、顔を洗ったり、鏡をみたりする真似をする。演じるというより簡単な所作である。顔を洗う真似は坂部冬祭りの日月面にも見られるが、世尊グツを他に日月迎えグツとも称する。演じる所作や題名が類似するのは何らかの関連性があるかもしれない。また同じではな

いが、「泥棒捕り」という寸劇が行なわれる所もある。祭官（祭りの代表者）の一人を泥棒に見立て、可笑しく面白い寸劇が行なわれる。泥棒が盗んだ包みの中には柄杓や瓢、お玉などが入っている。一種の宝である。お坊さんの居眠り真似は女巫が演じるが、泥棒捕りは男巫と祭官（男性）によって演じられる。

男巫によって執行されるのは最後の雑神を祭るコリグツである。男巫一人と杖鼓の囃子方と二人で進行する。即興性が強くて、見物人から一人を連れ出して行なう場合もある。コリグツは女巫の巫儀が終つて祭壇も片付けてから行なわれる。ここで登場する霊は神と呼ばれるほどのものではない。不幸に死んだ様々な亡霊たちである。これらの霊は女巫の祭儀には招かれてないモノである。即興性が強調されるし、演者の気持ちによって左右される場合も多いので、順序も演者によって異なる。李均玉氏が整理したところによると三十演目があげられている。

師丈コリ、科挙コリ、諸鬼神請拜コリ、冠礼コリ、鬼門開き、雑神不浄祓い、世尊神について来た下位神、コルメギ婆コリ、訓長コリ、欠唇コリ、漁師コリ、潜水鏡コリ、モグリ（潜り）、海女コリ、海苔採りで死んだ鬼神コリ、ワカメ採りで死んだ鬼神コリ、貝採りで死んだ鬼神コリ、刀に刺されて死んだ鬼神コリ、軍気の厳しさで死んだ鬼神コリ、首吊で死んだ鬼神コリ、毒薬飲んで死んだ鬼神コリ、小児麻痺コリ、僵僕コリ、交通事故コリ、軍隊コリ、盲目コリ、出産コリ、雑神退送コリ

(注15)

以上の演目からわかるように不幸な死に方をした亡霊に献物して送る。献物といっても祭壇にお供えした物を大きい盥に混ぜたもので、まるで豚飯のようなものである。一つの演目が終る旅に盥のものを一瓢取つて海に捨てる。これらのモノは招待されていない、鎮められるべき存在である。

別神グツにおいては神がかりという現象は画然としてみられないが、主神である部落の守護神に神託をうかがう時は神のヨリシロである竹の枝（または笹）を村の人に握らせ、神を降ろしてもらおうシステムになっている。神が降りた竹の枝の揺れによって女巫が判断して、部落住民に伝えるのである。しかし、今回は神がかりの体験をした女巫がいたので、神がかりは行なわれた。海を

つかさどるといわれる龍王様の巫儀の時、託宣があつた。別神グツには膨大な費用がかかるので今まで五年ごとに行なうことにしているが、一〇年ごとにしたという住民の願いがあつた。託宣は今までとおり五年毎に行なうべきだということであつた。神がかりが主機能ではない世襲巫の巫儀においても主神には神がかり、またはそれに準じる仕組みがある。しかし、最後に寸劇風に行なわれる、しかも女巫ではなく、囃子方の役をした男巫によつて行なわれるところには神がかりが起る余地はない。その代わりに素朴でありながら、仮面や他の小道具を利用して具体的に演じみせるのである。神がかりという信仰的な行事から演劇に向う傾向を導く要素が含まれていると思われる。

このような現象は神がかりを主機能にしている降神巫の巫儀にも見られる。それについては紙面の関係上省くことにするが、黄海道の船ヨンシングツや、万寿大宅グツなどに巫儀の最後頃に仮面を額にかけて戯れる場面がある。その仮面の神は正式な巫儀に招かれた主神や副神とは異なつて鎮魂すべきモノである。しかも、祀らないで粗末に扱ふと祟りを起す怖い存在である。

6. 韓国の仮面戯の神々

仮面戯とも称される韓国仮面戯は踊り(舞)と台詞による歌舞劇である。登場人物はほとんど仮面を付けるが、仮面を被らないものが登場する場合もある。内容は舞台を清める払いの舞(上佐舞)、破戒僧やその小僧の戯れ、両班(貴族)を諷刺する場面、疥癬やハンセン病などの不治の病気にかかった人物、みすばらしい老夫婦などの生活状況などである。それから姥は最後に死んで、巫女により葬儀(或いは野辺送り)が行なわれる。

現在伝承されているところは朝鮮半島の南東部地域である洛東江流域、ソウルとその以北の西北部地域(北朝鮮)である。仮面戯の担い手によつては土着型と半専門家による流浪型に分類される。土着型は部落の祭りが行なわれる際余興として行なわれるものであり、流浪型は半専門的な芸能集団が行なつた仮面戯である。多少の違いはあるが、仮面に対する信仰は両方とも残っている。仮面戯に登場する人物の本来の姿は神霊であつたが、現在は人格化された人間になっている。仮面戯に登場する人物が神霊である

として考える場合、神々の性格を分析することによって仮面戯の目的や役割がおのずから明らかになるだろう。ここでは京畿道地域の「楊州別山台ノリ」(注16)を中心に述べることにする。

今日の仮面戯の担い手は女性も含まれているが、本来は男性のみに限定されていたのである。それは伝承の問題から生じた最近の状況である。舞台は広場があれば十分で、特別な舞台装置はない。舞手と囃子方の仕度が整えると楽器を鳴らしながら町を練り歩く。見物人たちは行列の後尾について演者と一緒にまわる。指定された広場に到着し、集まった見物人達が公演の舞台になる広場を取り囲むと本公演が始まる。用いる仮面や、供え物を供えて神に告げる神事(告祀)が行なわれる。最初に行なわれる儀式の対象になる神は、その際唱える祝詞(祭文)からうかがうしかないが、祝詞には神の名はない。仮面戯に用いる仮面を祭壇に置くことから仮面を神として祀ることはわかるが、主神ではない。一般的には天神、地神、それから部落の守護神とされる城隍神になるが、それらの神が仮面戯という祭りの主神であるが、具体的な神体を持つ神ではない。漠然とした神である。祝詞は無事に仮面戯が行なわれるように、そして、仮面戯を観ている観衆も皆神々の祟りなしで、福を授けられるようにと祈るのみであり、いかなる神に祈るかは示されていない。

最初には仮面戯が行なわれる場所を清める意味の静かな舞(上佐舞)が厳かに行なわれる。僧帽を被り僧の衣装を纏い四方に向けて礼拝をする。地域によっては面を被らない場合もある。舞台を清める人間の舞である。第二場は疥癬僧が棒をもって踊ると前場の上佐一人が疥癬僧の棒を奪う内容である。疥癬かきという病気の痕跡が顔に表れているから付けられた名称である。第三場は墨僧と疥癬僧が登場して互いに疥癬について話合う狂言風の内容である。墨僧は目僧とも書くが、墨僧でも疥癬僧でも零落れた僧であり、崇敬される僧ではないことは確かである。第四場は蓮葉とヌンクムジェギが登場する。蓮葉は額に緑の蓮葉のようなものが画かれているから呼ばれる名称である。ヌンクムジェギは臉が動くように仕組まれているからの名称である。蓮葉は天殺星、ヌンクムジェギは地殺星であるといわれる。墨僧が二人の姿をみて驚き不思議に思う内容の狂言である。蓮葉とヌンクムジェギは台詞がない。第五場の「八目僧」場は「念仏遊び」、「お針遊び」、「法鼓遊び」の三部からなる。八目僧というのは上佐二人、墨僧四人、疥癬僧と僧の頭といわれるワンボを合わせて八目僧という。僧達が順次登場して踊るとワンボが出て、僧達の破戒行為を戒め

る。しかし、ワンボも面白可笑しい念仏を唱える。僧達とワンボの可笑しい問答が交わされる。「お針遊び」は僧の一人の息子、孫、曾孫が仮面戯の遊び場に出て馳走を買って食べて中毒をおこしたのでワンボに助けを求める。ワンボは針医（新主簿）を連れてきて診察するなど可笑しい狂言が行なわれる。本来僧には子孫があるはずがないのに、息子、孫、曾孫までいる、変わったものである。「法鼓遊び」の法鼓は仏教の行事に使うものであるが、遊女と遣手婆である倭丈夫、僧達が打ち戯れる。第六場は「破戒僧遊び」「查商い遊び」「酔発遊び」になっている。修行を積んだ老僧が登場して遊女に惚れて遊ぶ場面、そこに查商いが出て履物を売っていると遊女の気持ちを買おうと沓を買う。查商いがいつも共にしている猿に沓代金をもらってくるようにすると、猿が遊女のところに行つて卑猥な行動をする。「酔発遊び」には赤い面を被った酔発が登場して老僧が若い女性と遊んでいるのをみて女性を奪い、老僧を追い払う。遊女との間に赤ん坊が生まれ、育てる場面である。第七場は「依幕使命」「捕盗部将」からなる。下人であるマルデウギとソイテウギが貴族（両班）を嘲弄する場面と、両班（生員）と遊女（小巫）の間に捕盗部将が入つて遊女を奪う内容である。両班は身分的には貴族であるが、こまづかいであるマルデウギやソイテウギに嘲弄されることや、自分の若い女（遊女）も奪われるなさけない存在である。追い払われる存在である。特に両班兄弟の末子は口が歪んだ顔をしている。第八場は白爺と白姥の場面である。戦争の際夫婦離れてから再会するが、白爺は若い女性を妾として連れてきたので夫婦喧嘩が始まり、白姥が死んでしまう。それから巫女を呼んで葬儀を行なう。演目の内容は他の地域と大同小異であるが、なによりも注目されるのは最後に行なわれる葬式である。「鳳山タルチュム」や「楊州別山台ノリ」などには巫女が出て死んだ姥の亡霊を慰める巫戯（グツ）を行なう。東南部地域の仮面戯には葬式の野辺送りが行なわれる。仮面戯の全体から見ると一つの演目にすぎないが、仮面戯の性格を把握するには重要な手がかりになると思われる。葬式が仮面戯の最後に行なうことは、仮面戯は本来鎮魂の意識が根強く作用しているからである。

以上の内容からもわかるように登場する人物のほとんどはまともな人間ではないことがわかる。人物性格の設定が可笑しい人物を登場させることによって笑いを誘う内容ではあるが、それらの人物を死んだ人の亡霊や神霊として考えると、尊い存在ではないことは確かである。東海岸地域の別神グツに見られる男巫によって行なわれる、招待されない存在であり、不幸な人生を歩んだ人

間の亡霊である。仮面戯は今まで多くの研究がなされてきたが両班（貴族）に対する庶民の抵抗意識の表出であるとか、理念的な仏教に対して民衆的な実利主義を顕すものであるという説がなされてきた。しかし、登場人物を神霊としてみると、仮面戯は一つの鎮魂儀礼にあるに違いない。祭りに正式に迎えられる神ではなく、神々について来るモノで、齋場には入れない、招待されない存在である雑鬼、雑神の類である。

これらの存在は正式には祀らないが、粗末にすると祟りを起こす存在である。遠山祭りに登場する遠山土佐守一族の存在と類似する存在である。仮面をもつて登場するモノは天神や地神、城隍神のような主神ではなく、鎮めるべきモノ、即ち、鎮魂神の類である。第四場の蓮葉やヌンクムジェギ、第六場の酔発、第七場のマルデウギやソイテウギなどはそのようなモノを追い払う職能的な存在である。他の地域ではビビやヨンノ等の想像の動物が登場してそれらのモノを追い払う役割を果たすが、同じく職能的な存在である。仮面戯に登場するのは鎮魂神であり、職能神であるが、部落の主神や副神が登場するのはほとんどないのがある。

7. 結び

以上で日韓両国の芸能の中で神の顕現の方式によって神を分類して述べてきた。神が芸能の場に登場する方式は神の性格によって異なることがわかる。主神、副神、職能神、鎮魂神はそれぞれ顕現の方式がことなる。主神と副神は面の姿で登場するのはほとんどない。それから祭りの主管者によって行なわれる傾向がある。一方、職能神と鎮魂神は面や小道具などにより具体的に現れる。そして神事の専門職ではない一般人（氏子）による神の顕現が行なわれる。祭りにおいて行動の主権がだれかによって言語と舞にわけて分類して整理すると次のようになる。

言語の分類

- ① 対しての人間の祝詞：祈願、祈禱文

- ② 神の一人称の祝詞：託宣
 - ③ 神の三人称の祝詞：祈祷師の託宣の解釈
- 舞の分類

- ① 神がかりする前段階の舞：清めの舞、神降ろしの舞
 - ② 神がかりの状態での舞：神の舞
 - ③ 神の顕現を再現した人間の舞：寸劇、狂言、奉納の舞
- 神の顕現の方式

- ① 神憑り：託宣
- ② 道行き：神の降臨の道
- ③ 人形：神の姿
- ④ 人間化：仮面、舞踊、マレビト
- ⑤ 神画：祭壇に飾る神の姿
- ⑥ 神像：祭壇に置かれ、神として祈るもの（*人形と重なる部分があるが、人形は可動するもの、神像は不動のもの）
- ⑦ モノ：採り物（御幣、榊、神の飾り物、莫盛）

祭りに顕現する神は性格によって、主神、副神、職能神、鎮魂神に分類すると、神の顕現の方式も変るし、担い手も異なるが、その前後は錯綜している。つまり祭りに登場するすべての神は神がかりとい現象で顕現するのが本来の姿であろう。しかし、巫者という神がかりの専門職がなくなり、それが一般人に委ねられることによって、神がかりの代替仕組みとして面を被ることになったと思われる。しかし、主神や副神は神がかりがなくても、神事の専門者によって行なわれるが、職能神や鎮魂神になると神事の専門者の変わりに一般人が担うことになり、面が主な神の顕現方式になったのであろう。

即ち、主神や副神は祭りに登場する正式な神である。その神の顕現は神がかり、またはそれに準じる方式で行なわれる。また主神、副神を祀るときは神主、禰宜、女巫などの祭りの主管者が担う。しかし、職能神と鎮魂神は氏子や一般住民、または補助者である男巫が執行する。職能神と鎮魂神には神がかりがなく、仮面や小道具などによって顕現される。韓国の仮面戯に登場する人物や、日本の能や狂言など人物が神の顕現方式の中でも、職能神と鎮魂神の部類に属する神であることについては稿を新たに述べて述べることにする。

注

注1) 山折哲雄『日本の神1 神の始原』平凡社 一九九五年 頁一八

注2) 朴鎮泰『仮面戯(タルノリ)の起源と構造』セ文社 一九九〇年 頁四九

主神、副神、職能神という用語は朴鎮泰が部落祭と仮面戯(タルノリ)の構造分析の際用いたものである。即ち、村人による祭りと巫覡(巫堂)による祭りが複合された形態で行なわれる部落祭の中で、主神と副神は部落の守護神であり、巫神を職能神といっている。主神は限定地域の守護神に過ぎないし、全知全能の神ではないから諸巫神と一緒に祭る。部落の守護神のみならず、他の諸神も部落住民の吉凶禍福を作用する能力を持っていると信じているからである。部落の守護神を祭る儀礼を通して地縁的な連帯感を強化すると同時に、職能別に分化された神々と一緒に祭ることによって、全体的な福利を蒙る多神教的な発想の産物であるという。そのような分類は祭り全体の構造を知るためには有効であると思われるが、祀る担当者や神の顕現方式を考える上ではもつと細分類する必要がある。

注3) 早稲田大学日本民俗学研究会『木沢の民俗―長野県下伊那郡南信濃村木沢―』一九八六年 頁一〇八―一一六

注4) 山折哲雄 前掲書 頁二三

注5) 早稲田大学日本民俗学研究会 前掲書 頁五九

注6) 前掲書 頁一〇四

注7) 前掲書 頁一〇四

注8) 桜井弘人「遠山霜月祭の面―その構成のあり方と変容過程―」『遠山の霜月祭考』後藤総一郎・遠山常民大学 編 一九九三年 頁七三

注9) 早稲田大学日本民俗学研究会『木沢の民俗―長野県下伊那郡南信濃村木沢―』一九八六年 頁二一六

注10) 岩田勝『神楽新考』名著出版 一九九二年 頁三三五―三三七

注11) 『長野県下伊那郡天竜村坂部民俗誌稿』長野県史刊行会民俗編纂委員会 一九八五年 頁七七

注12) 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能』第六卷 錦正社 一九九五年 頁二八五―二八八

注13) 李杜鉉『韓国民俗学論考』学研社 一九八八年 頁一八六

注14) 崔吉城『韓国巫俗誌』一 亜細亜文化社 一九九二年 頁四六―四八

注15) 李均玉『東海岸地域巫劇研究』図書出版バクイゾン 一九九八年 頁八八―八九

注16) 李杜鉉『韓国仮面劇選』教文社 一九九七年 仮面戲は大きく二つの系統に分類される。山台戲系統と土着仮面戲系統がそれである。土着仮面戲系統に属する河回仮面戲は部落祭として仮面戲が行なわれるが、他の仮面戲とは異なり主神が仮面の姿で登場する。